

『貪欲からの解放』 ヤコブの手紙 5 章 1～6 節

1. 金持ち

本日の箇所には、金持ちたちへの警告が記されています。当時、財産として主要なものが三種類ありました。穀物と着物、金銀です。彼らは必死に財宝を蓄えています。『**終わりの日**』には、それらはさびた金銀のように何の役にも立ちません。

1 節に「**金持ちたちよ、よく聞きなさい。迫り来る自分たちの不幸を思って、泣き叫びなさい。**」とあります。「**金持ち**」になることは、悪いことでしょうか。聖書は「富」そのものを非難してはいません。例えば、アブラハムは創世記 13 章 2 節で「**アブラムは家畜と銀と金を非常に豊かに持っていた。**」とあります。ヨブは、ヨブ記 1 章 3 節に「**彼は羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭、それに非常に多くのしもべを所有していた。この人は東の人々の中で一番の有力者であった。**」とあります。

また、コリント第二 9 章 6～12 節には「**私が伝えたいことは、こうです。わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます。一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。神はあなたがたに、あらゆる恵みをあふれるばかりに与えることがおできになります。あなたがたが、いつもすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれるようになるためです。『彼は貧しい人々に惜しみなく分け与えた。彼の義は永遠にとどまる』と書かれているようにです。種蒔く人に種と食べるためのパンを与えてくださる方は、あなたがたの種を備え、増やし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、すべてを惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して神への感謝を生み出すのです。なぜなら、この奉仕の務めは、聖徒たちの欠乏を満たすだけでなく、神に対する多くの感謝を通してますます豊かになるからです。」とあるように、確かに正当な手段で獲得された「富」があるし、責任ある活用をすれば「富」は祝福されたものとなります。**

しかし、テモテ第一 6 章 10 節に「**金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました。**」とあります。また、伝道者の書 5 章 10 節には「**金銭を愛する者は金銭に満足しない。富を愛する者は収益に満足しない。これもまた空しい。**」とあります。

前回の話の中で、ルカの福音書 12 章 16～20 節に「**それからイエスは人々にたとえを話された。『ある金持ちの畑が豊作であった。彼は心の中で考えた。『どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。』そして言った。『こうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。『わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。』』しかし、神は彼に言われた。『愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』」とありました。この金持ちは、一番頼りにできるのは蓄えてあるこの食糧だから安心しなさいと自分自身に言っています。この例えを通して、イエス様は「富」が神に代わるようなことがあるからと警告をしています。人は弱いものですから、見えるものに頼りがちです。見えるものに頼ってはいけないとは思いますが、それが神にとって代わってしまうと問題だと言われたのです。**

この農夫は豊作を得て、倉の立て直しという設備投資ができるようになりました。この人の努力があったからだと思います。たくさんの収穫が得られたことは、悪いことではありません。では、なぜ神は「**愚か者**」と言ったのでしょうか。

2. 愚か者

聖書には、「**愚か者**」という言葉が、53 回出てきます。そのうち新約聖書では、7 回です。つまり多くは、旧約聖書に出てきます。中でも詩篇は 7 回、箴言には 22 回出てきます。幾つかに分けることができますが、**第一に「愚か者」は、神を敬まない人であることがわかります。**詩篇 14 篇 1 節に「**愚か者は心の中で「神はいない」と言う。彼らは腐っていて忌まわしいことを行う。善を行う者はいない。**」とあります。詩篇 53 篇 1 節には同じように「**愚か者は心の中で「神はいない」と言う。彼らは腐っている。忌まわしい不正を行っている。善を行う者はいない。**」とあります。

第二に言葉についてです。箴言 10 章 8 節には「**心に知恵のある者は命令を受け入れ、無駄口をたたく愚か者は滅びに落ちる。**」とあります。箴言 10 章 10 節は「**目で合図する者は人に痛みをもたらし、無駄口をたたく愚か者は滅びに落ちる。**」とあります。伝道者の書 10 章 14 節には「**愚か者はよくしゃべる。人はこれから起こることを知らない。これから後に起こることを、だれが彼に告げることができるだろうか。**」とあります。

第三に人の言うことを聞かないということです。強情な人です。箴言 1 章 7 節には「**【主】を恐れることは知識の初め。愚か者は知恵と訓戒を蔑む。**」とあります。箴言 12 章 15 節は「**愚か者には自分の歩みがまっすぐに見える。しかし、知恵のある者は忠告を聞き入れる。**」とあります。また箴言 15 章 5 節には「**愚か者は自分の父の訓戒を侮る。叱責を大事にする者は賢くなる。**」とあります。

この中で一番の問題は、神を敬わないことです。この農夫は、神を敬わないゆえにイエス様は「**愚か者**」と言われたのです。この農夫は、「**私の作物**」「**私の倉**」「**私の穀物や財産**」「**自分のたましいに**」と何度も「**私**」と言っています。天気が良くなければ、水がなければ、空気がなければ、作物は取れません。作物を育てるのには、自然の恩恵を受けています。それなのに、自分、自分と言っている中にこの農夫の「愚かさ」があると思います。自分が獲得したものだから、神がなくても十分だというところに「愚かさ」があります。

3. 貪欲

その前の箇所 15 節には「**どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい。人があり余るほど持っていても、その人のいのちは財産にあるのではないからです。**」とあります。つまり、人は「**貪欲**」に支配されやすいということです。

十戒の十番目は、「**あなたの隣人の家を欲してはならない。あなたの隣人の妻、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを欲してはならない。**」(出エジプト記 20:17) となっています。つまり「**むさぼるな**」ということです。「**むさぼり**」は、外に現れてきません。しかし、「**むさぼり**」は、殺しや姦淫や盗みなどを生じさせる心の思いです。すなわち、「**むさぼり**」がそれらの引き金となります。

「**むさぼり**」への誘惑は、悪い人だけに來るものではありません。イエス様にも來ました。マタイの福音書 4 章 8～9 節に「**悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての王国とその栄華を見せて、こう言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう。」**」と誘惑がありました。「**むさぼり**」をくすぐるとしたのです。それに対して、イエス様は、「**下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある。**」(10 節) と言われました。つまり「**ノー**」と答えられたのです。イエス様のような方にも、もちろん、どんな立派なキリスト者であっても、「**むさぼり**」の誘惑がやってきます。

では「**貪欲**」とはどういう意味でしょうか。ギリシア語の意味は、「**より多くまたはより多くを持つ**」という意味です。つまり「**貪欲**」は、「**もっと欲しいと思う心**」という意味の言葉です。あるにもかかわらず、もっと欲しいということです。「**むさぼり**」に人間は支配されやすいのでイエス様は注意をしなさい、自己防

衛しなさいと語ったのです。私たちがいつもイエス様の方を向き、いつでもイエス様の恵みに心を向けて生活しなければ、「貪欲」が私たちを支配することが安易にあるとイエス様は語っているのです。

ヤコブ 4 章 1～3 節には、「**あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るものではありませんか。あなたがたは、欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。熱望しても手に入れることができないと、争ったり戦ったりします。自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです。**」とありました。これは、制御できない欲望の破壊的な性質と、それがいかにして人々を他人に害を及ぼすように導くかを強調しています。

4. 克服するには

では「貪欲」の反対語は何でしょうか。辞書ですと「無欲」となっています。この愚かな金持ちのたとえ話で、「**富**」を蓄えたが死の準備ができていなかった男を描いています。本日のヤコブ 5 章 2～5 節にも「**あなたがたの富は腐り、あなたがたの衣は虫に食われ、あなたがたの金銀はさびています。そのさびがあなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くします。あなたがたは、終わりの日に財を蓄えたのです。見なさい。あなたがたの畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。刈り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています。あなたがたは地上でぜいたくに暮らし、快樂にふけり、屠られる日のために自分の心を太らせました。**」とあります。彼が「富」を分かち合い、物質的な物よりも人間関係を優先していたなら、彼の人生はもっと有意義なものになっていたでしょう。

パウロは、ピリピ書 4 章 11～13 節は、「**乏しいからこう言うものではありません。私は、どんな境遇にあっても満足することを学びました。私は、貧しくあることも知っており、富むことも知っています。満ち足りることに飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです。**」とあります。状況に関わらず満足するという考えを表現しています。

持ち物が、どんなにか私たちの喜びを奪っているのでしょうか。しかし、イエス様はルカの福音書 12 章 15 節で「**どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい。人があり余るほど持っても、その人のいのちは財産にあるのではないからです。**」と言いました。山上の説教の中で、イエス様は「**自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのです。**」（マタイの福音書 6：19～21）と語りました。ところが、今日、多くの人々が喜びは持ち物から得られると考えています。しかし持ち物は、私たちから神が与えてくださる本当の喜びを奪い去るのです。

パウロは、ピリピ書 4 章で一般の人たちは「**地上のことだけを考える者たち**」（19 節）と表現していますが、20 節に「**しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。**」と霊的な思いを抱くキリスト者は、天上のことに心を向けていると言っています。霊的な思いの人は、この世のことを天国の観点から見ます。そこには何と大きな違いがあるのでしょうか。実際に見ることのできるものばかりでなく、評判、名声、業績という目に見えないものも含めて、私たちは「もの」に引き込まれやすい存在です。しかし、「もの」自体が罪深いものではありません。神は「もの」を造り、創世記 1 章 31 節で「**見よ、それは非常に良かった。**」と宣言しています。神は私たちが生きるために必要なものが確かにある、ということをご存知です。神は「**私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる**」方です（I テモテ 6 章 17 節）。

しかし、イエス様はルカの福音書 12 章 15 節で「**どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい。人があり余るほ**

ど持っけていても、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」と私たちの生活は持ち物の豊かさによらない、と警告しています。持ち物を探求することが、人々から喜びを奪うのです。このことはキリスト者をも巻き込んでいます。持ち物を所有したいと思うと、持ち物に所有されるようになります。

パウロは、失ったものよりはるかに多くのものを得ました。得たものがあまりにすばらしかったので、それ以外のすべての「もの」は塵あくと見なしたのです。パウロの生活は、この世の安っぽい「もの」ではなく、キリストの内に見られる永遠的な価値に依存していたからです。パウロは「霊的な思い」を抱き、天上の観点から地上の「もの」を見ていました。

「もの」のために生きる人は、本当の幸福をつかむことができません。そういう人は自分の宝を守ることには心を配り、その価値が失われるのではないかと思ひ煩っていなければならないからです。霊的な思いを抱く人はそうではありません。キリストの内にある人の宝は決して盗まれることがなく、その価値は永久に失われることがないのです。ヨハネ第一 2 章 17 節に「**世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行行者は永遠に生き続けます。**」とあります。

感謝の気持ちと寛大さを育むことも、「貪欲」を克服する上で重要な要素です。与えるという行為は、自己の欲望から他人の幸福へと焦点を移すのに役立ちます。ルカの福音書 6 章 38 節に「**与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れてもらえます。あなたがたが量るその秤で、あなたがたも量り返してもらえます。**」とあります。これは、与えることを奨励し、豊かに返されるだろうと約束しています。

5. 希望はどこに

クリスマス・カロールはイギリスの作家ディケンズが書いた小説です。クリスマス・カロールはクリスマス奇跡を中心に、強欲な人間が、同情心のある優しい性格に変わる、いわゆる改心の物語です。幽霊の超越的な力によって過去・現在・未来を旅し、失われていた本来ある人を思いやる心、人間らしさを取り戻すという作品です。

人は、過去、現在、未来を生きています。現在の自分のあり方は、過去の出来事によって、また将来の自分の希望によって形づくられます。現在の私の姿は、過去と未来が集約したものです。スクルージの変化は、過去の自分の姿に想いを馳せ、将来の自分の行く先に恐れを抱いて、自分の現在の姿を悔い改めて、新しい人に変えられるのです。

聖書は、スクルージだけではなく、私たち一人一人も神から離れた自己中心的な罪人であると語ります。人は死んだ後、自分のしてきたことに対して、神の前に申し開きをしなければなりません。しかし、神は、私たちが神の裁きを受けないための一つの道を開いてくださいました。神の愛するひとり子であるイエス・キリストが、私たちのすべての罪を追って十字架にかかり、身代わりとして神の裁きを受けてくださったのです。そのイエス・キリストを救い主として信じる信仰によって、人は、もはや鎖を繋がれたものとしてではなく、罪赦され、新しく生まれ変わったものとして、希望と喜びの人生を生きることができるのです。私たちは、キリストの愛によって変わることができるのです。

ローマ書 15 章 13 節に「**どうか、希望の神が、信仰によるすべての喜びと平安であなただを満たし、聖霊の力によって希望にあふれさせてくださいますように。**」とあります。私たちの「希望」は、「富」にではなく、神にあるのです。ペテロ第一 1 章 4～5 節に「**また、朽ちることも、汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これらは、あなたがたのために天に蓄えられています。あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりの時に現されるように用意されている救いをいただくのです。**」とあります。